

第 51 回国際漢蔵語学会開催報告*

藤原敬介

京都大学

主要語句：国際学会、大会運営

1 はじめに

本稿では、2018年9月25日から2018年9月28日まで京都大学で開催された第51回国際漢蔵語学会（以下「本大会」として言及する）について報告する。

国際漢蔵語学会について報告したものには橋本 [1970, 1973, 1975, 1979]、Matisoff [1973]、Hashimoto [1975]、岩田 [1989]、藪 [1993, 1995, 1996, 1998]、長野 [1993, 1994]、藪・中嶋 [1994]、林 [2004]、Pelkey [2005]、Karlsson [2007]、Bradley [2008]、Konnerth [2013]、Genetti & Donlay [2016] などがある^{注1}。だが、大会の舞台裏まで報告したものはすくない^{注2}。

本大会のやりかたは通常の学会とはさまざまな点でことなる。だが、失敗もふくめた経験を共有することで、国際学会開催をころざす人の参考になることを意図している。

本稿の構成は次のとおりである。2で大会開催の経緯についてのべる。3で大会開催準備についてのべる。4で大会開催期間中についてのべる。5で大会開催後についてのべる。6で本稿をまとめる。附録として本大会のプログラムを再掲した。

2 大会開催の経緯

2.1 国際漢蔵語学会とは

国際漢蔵語学会(International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics: ICSTLL)とは1968年以来、50年にわたり、シナ・チベット諸語研究者の有志によって開催されてきている国際学会である^{注3}。国際学会とはいえ、会長はおらず、常設の事務局も存在しない。あく

* 本稿は2018年10月13日の第90回言語記述研究会(京都大学文学部)における筆者による「第51回国際漢蔵語学会開催報告」をもとに文章化したものである。

^{注1} このほか、中国から出版されている各種雑誌でも国際漢蔵語学会の報告が掲載されている。<https://www.cnki.net/>で検索すると、多数の報告がでてくる。

^{注2} 言語学関係の国際研究集会の舞台裏まで報告しているものとしては梶 [1999, 2001, 2003, 2005] がある。大津由紀雄研究室編 [2010] は国際会議の開催方法を丁寧に解説した本として有用である。中野 [発表年不明] による「国際会議・国内学会の運営ノウハウ集」にはこまかいアドバイスがいろいろとあり、参考になる。

^{注3} この学会は、最初の三回は Conference on Sino-Tibetan Reconstruction (COSTRE) とよばれていた。第4回大会から“The Fourth International Conference on Sino-Tibetan Language and Linguistic Studies”というように“International”を冠するようになり、第5回でも踏襲された [Matisoff 1973: 155-156]。そして第6回大会から“International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics”となったようである (Sprigg [1980: 110] では“International Conference on Sino-Tibetan Language and Linguistics”、Matisoff [1996: 110-111] では“International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics”と表記されている。“Language”なのか“Languages”なのかという相違がある)。他方、馮編訳 [1979a,b,c] によれば、第7回大会から“International Conference on Sino-

までも有志のボランティアによって運営されてきている学会である^{注4}。

国際漢蔵語学会は、当初はシナ・チベット諸語の系統関係が議論の中心であった。しかしながら、言語学にかかわる分野であれば、音声学・音韻論、形態論、統語論、意味論、歴史言語学、社会言語学などさまざまな分野からの発表がおこなわれるようになってきている。特に近年は、中国やインド、東南アジア諸国での臨地調査が容易になってきたことをうけて、当該地域の未記述言語や消滅危機言語にかんする研究発表もさかんである。また、シナ・チベット諸語の枠組みをこえて、近隣のオーストロアジア諸語やオースロネシア諸語、タイ諸語等にかんする研究発表もみられるようになってきている。本学会での研究発表は *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* に代表される学術雑誌等で論文化され、世界の言語学界においても存在感を発揮している。

2.2 大会開催の経緯

筆者がはじめて国際漢蔵語学会に参加したのは、2003年にオーストラリアのメルボルンでラ・トローブ大学の David Bradley 教授が主催者となって開催された第36回大会である。その後、7回の大会に参加してきた^{注5}。日本からの研究者が近年は毎回10人前後は参加していることから、日本での大会開催をもとめる声はおおきかった。だが、私見では、学会開催にともなう負担を忌避する傾向がしかるべき立場にある研究者にみられ、なかなか開催されてこなかった。

他方、日本では、チベット=ビルマ諸語に関連する研究者が20人をこえ、2003年以来チベット=ビルマ言語学研究会^{注6}が年3回開催されるようになっていた。この研究会で研鑽をつんだ若手研究者が日本の大学で専任教員としてつとめるようになり、1993年に長野泰彦教授らが中

Tibetan Languages and Linguistics”と称するようになったとある。

なお、第6回大会の報告である橋本 [1975: 14-15] は、このあたりの事情を次のように茶化している。「(「国際」云々という名称は、西欧から参加された二三の常連の存在によって救われている；昨年は危く有名無実と化するところであった)。誰でも会を開くからには、盛会でしたと祝われたいのが人情というものである。しかし盛会にするためには当り前の事乍ら費用が掛かる(大西洋の向う側から来て下さる方々には旅費位は出さなければなるまい；研究発表をして下さる方々の旅館の勘定書位は持たないと主催者のコケンにかかわる)。そこであちらの財団に頼みこみ、こちらの機関に談じこむ。そのためには華々しい名称が欲しい。かくして「国際」どころか、漢蔵諸語の研究とその「言語学的研究」とを分けるといふ、誰に尋ねても判った様な解らない様な離れ技もやらざるを得ないという破目に陥った次第である」。

^{注4} 「この学会には、大変不思議なことに、学会本部とか学会事務局というものが存在しない。会長もいないし、理事もいない。創立当時の中核的メンバーが現役で活躍しており、また、彼らの弟子達が極めて積極的にボランティアで学会を支えている。これらの人々の相互連絡によっていろいろのことが決定される。こんな専門的で小規模の学会が二五年も続いているのは良い意味でのアメリカ的ボランティア精神と、形式としての組織が研究者の自由を拘束しない体質に起因しているのかもしれない」[長野 1993: 64]

^{注5} 具体的には、第37回(2004年・スウェーデン・ルンド大学)、第39回(2006年・アメリカ・シアトル・ワシントン大学)、第40回(2007年・中国・ハルビン・黒龍江大学)、第41回(2008年・イギリス・ロンドン大学)、第45回(2012年・シンガポール・南洋理工大学)、第49回(2016年・中国・広州・暨南大学)、第50回(2017年・中国・北京・香山飯店)である。

^{注6} 研究会の Web ページは <https://sites.google.com/view/tbkenhp/> (最終確認 2019年2月4日) である。過去の例会記録も公開されている。

心となって国立民族学博物館で開催された第 26 回大会以来、25 年ぶり 2 回目の国際漢蔵語学会開催を可能とする機運が日本でもようやくたかまっていた。

このような状況の中、2016 年 10 月になって筆者が京都大学白眉センターに 5 年任期で採用されることになった。白眉センターは研究に専念する環境にあるので研究に専念すべきではある。一方で、それほど手間のかかることをしなくとも国際学会開催は可能であると筆者は以前からかんがえていた。そこで、第 1 回大会以来実質的に大会運営事務局長的な役割をはたしているカリフォルニア大学バークレー校の James A. Matisoff 教授^{注7}が 2016 年 11 月に観光目的で来日された機会に、2018 年に第 51 回大会を京都で開催したいと打診し、開催が決定した^{注8}。そして 2017 年 11 月に北京で開催された第 50 回国際漢蔵語学会の最終日に、2018 年は京都大学で開催されるということが正式に発表された^{注9}。

日本で本大会を開催するにあたり、三つの目標があった。

1. 50 年にわたり継続してきた大会の開催をうけおうことで、斯界に相応の貢献をすること。
2. 日本におけるシナ・チベット言語学研究成果を国際的に周知すること。
3. 将来ふたたび本学会を開催するような若手研究者を育成すること。

いくつかの困難はあったけれども、上記の目標は完全に達成された。そういう意味では、学会開催は成功であった。

^{注7} 「事実上は、カリフォルニア大学の J・A・マティソフ（昭和六三年度国立民族学博物館客員教授）が連絡のキーステーションになっており、また、彼のところで *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* という雑誌を編集していて、その Editorial Board がこの学会の中核的メンバーと一致しているため、外からは彼が会長のように見えるが、彼はあくまでも一会員である」[長野 1993: 64]

^{注8} 当時、京都大学人文科学研究所の池田巧教授が大型科研への申請を計画していた。採択されれば京都で国際漢蔵語学会を開催する予定であるという情報をえていた。そこで、池田教授に主催をおねがいし、筆者が事務局を担当するという提案をした。しかし、科研は採択されるかどうかかわからないので、科研に依存せずに開催するというなら、筆者が主催してやればよいという助言をえた。結果的に池田教授の科研は 2017 年度には不採択であったけれども、2018 年度には採択された。筆者も本大会も池田教授の科研とは直接的には関係がない。ただし、大会参加者のなかには池田科研の関係者も複数あり、池田科研から旅費がでていた参加者もいたようである。そういう観点からは、本大会は池田科研からも間接的に援助していただいたといえる。なお、池田教授主催による国際漢蔵語学会は 2022 年ごろにふたたび京都で開催予定であるとさく。

^{注9} 翌年にどこで誰が大会を主催するかということは、例年は大会懇親会の席で発表される（“The venue of the next one is often decided on the spot at the annual Conference banquet!” [Matisoff 1994: xiv]）。第 50 回大会でもそうなのではないかと予想していた。だが、第 50 回大会ではそうならなかった。大会初日に受付にいったところ、二日後の最終日の閉会式において参加者全員の前で 2018 年の第 51 回大会について話をするように、事前に何の相談もなく突然通告された（中国での大会では、相手の都合をきくことなく、一方的なものごとがきめられる傾向にある）。第 50 回では大会懇親会が開催されないということが理由のようだった（ただし、大会主催者から特別に招待された研究者だけが参加できる VIP 専用の食事会が開催されたそうである）。なお、第 51 回大会の説明に使用したスライドは第 51 回大会用のページから大会用の Dropbox へのリンクという形式で公開している (https://www.dropbox.com/s/7by3csjn3wdtj28/icst1151_plan.pdf?dl=0 最終確認 2018 年 11 月 20 日)。

3 大会開催準備

3.1 大会実行委員会

第 51 回国際漢蔵語学会を開催するにあたり、形式的にはあるけれども、大会実行委員会を組織した。筆者が大会実行委員長をつとめ、林範彦氏（神戸市外国語大学）と倉部慶太氏（東京外国語大学）に大会実行委員を依頼した。

林氏はチベット・ビルマ言語学界限だけでなく、中国語学界限にも顔がきき、国際的にも著名な研究者であるだけでなく、国内外の学会開催経験も豊富である^{注10}。倉部氏はシンガポールやオーストラリアでの長期の研究経験もあり、国際的に活躍している新進気鋭の研究者である。二人とも国内外で多数の研究者と共同研究を展開しており、関係者からの信頼もあつい。この二人に大会実行委員として協力してもらえれば、参加者も安心できるとかんがえた。二人には、案内状草稿の確認、Web ページの確認、発表要旨の審査、トラブル対策等について相談にのっていただいた^{注11}。

3.2 主催と共催

本大会の主催は第 51 回国際漢蔵語学会実行委員会である。大会を運営するだけならば、これだけで十分である^{注12}。

^{注10} 2003 年以来、チベット=ビルマ言語学研究会の世話人として研究会を実質的にきりもりしているほか、2011 年の第 17 回ヒマラヤ諸語会議、2013 年の日本言語学会、2019 年の国際中国語学学会など、林氏が運営にたずさわった学会は多数ある。

^{注11} 林氏と倉部氏に大会実行委員を依頼したのは、先述のとおり、参加者に安心してもらうためであった。しかし実際には、林氏と倉部氏がひかえてくれたおかげで一番安心していたのは筆者自身である。たとえ筆者に不手際があったとしても、二人がどうか処理してくれるという安心感があったおかげで、大会をのりきることができた。

^{注12} かつては、国際学会・国際会議といえば、所属機関の研究者はもとより、事務職員の方々まで総出で準備をすることが常であったらしい。たとえば次のような記述がある。

「また、予算の立案段階から集会終了後の後片付けに至るまで、運営委員会を実践面で支えてくれた国立民族学博物館の管理部や情報管理施設に対して同様の謝意を捧げたい。わけても、研究協力課諸兄の奮闘がなかったら、ここまでオーガナイズされた集会にはならなかったと思う」[長野 1994: 89-90]

「開催に関しては（中略）事務の方々が一丸となって支えてくださった。（中略）また COE 非常勤研究員の久住真由さんは計画の立案時から報告書の作成まで、ずっと傍にいてくださった。さらに、AA 研の大学院博士後期課程の学生やアルバイトの学生たちの働きも大きな支えであった」[梶 1999: 11]

「最後になったが（中略）多くの事務官が積極的に仕事を分担してくださったことも忘れずに書いておきたい。しかしながら、誠心誠意、全力を傾けてくださった COE 非常勤研究員の栄谷温子さんには頭が下がる思いである。（中略）他の COE 非常勤研究員の方々、さらにリサーチアシスタントの大学院生（中略）同僚諸氏には多くの手をわずらわせることになったが、快く分担を引き受けてくださった」[梶 2001: 8]

だが、2003 年ごろからは、状況がかわってきた様子もうかがわれる。

「これからは国際シンポジウムをはじめいろいろなイベントを開催する時は、主催する人間がかなり強く気持ちを持って主体性を発揮しなければならない時代になったと言うべきかもしれない」[梶 2003: 12]

しかし、筆者が所属する京都大学白眉センターとの共催という形式でなければ京都大学学術リポジトリに大会予稿集を登録できないとわかった。そこで、白眉センターに依頼し、共催ということにさせていただいた。白眉センターからは、大会期間中にノートパソコンをおかりすることもできた。

このほか、後述する助成金で大会開催を支援してくれた各団体名は「後援」という形式で Web ページやポスターに明記した。

3.3 予算

国際学会開催について、一番問題となるのはお金である。国際漢蔵語学会開催のためにいくらかかるかについては、第 25 回大会では 1 万ドル^{注13}、第 26 回大会では 1000 万円 [長野: 直談] であったそうである。このほか、京都大学教育研究振興財団で公開されている報告書によると、2012 年にキャンパスプラザ京都で開催された第 9 回言語進化の国際会議では約 1250 万円 (海外参加者 200 名・国内参加者 150 名)、2015 年に京都大学で開催された第 8 回世界アフリカ言語学会議では約 540 万円 (海外参加者 127 名・国内参加者 35 名) といった数字があがっている。

もとより筆者にそれほどの予算はない。当初の予定では、参加費収入が 30 万円ほどであり、その範囲で開催することをかんがえていた。

3.3.1 収入

3.3.1.1 登録料

本大会では発表者による大会登録料 (registration fee) のみでの運営を計画した^{注14}。

国際学会でよくみられる「儀式」(開会式、閉会式、開催校挨拶、集合写真の撮影など) や「サービス」(無料インターネット接続サービス、休憩時間の軽食や飲み物の提供、大会プログラムやランチマップ、要旨集などの印刷、ホテルの予約代行、多数のアルバイトによるきめこまかな対応など) は排し、低予算で簡素な大会を計画していた。登録料は 3000 円とした^{注15}。ただし、一定の登録期間後に発表を希望する参加者に対しては、10000 円の登録料をはらうことで参加可能とすることにした^{注16}。

注13 「この学会のために主催者が集めた寄付金は約一万ドルで、その四分之三はヨーロッパと米国東部からのゲスト・スピーカー達への旅費・滞在費補助に充てられ、残りがコピー代と Banquet/Official Meeting 以外の簡単なパーティーの飲物代である」 [長野 1993: 69]

注14 ここで「参加費」ではなく「登録料」としている理由は、後述するように、実際に参加しなくとも共著者として名前をだす人がいることを意識してのことである。

注15 二日間開催される日本言語学会の大会参加費は、会員は 2000 円である。そこで、三日間の本会議を予定している本大会での大会登録料は 3000 円とした。ただし、日本言語学会では、年会費をおさめていない非会員のばあい、参加費は 3000 円である。国際漢蔵語学会では、年会費は存在しない。日本言語学会の非会員参加費に準じて、一律 5000 円程度の登録料としてもよかったかもしれない。

注16 登録期間の相違によって大会参加費を増減することは、国際学会ではよくみられることである。ただし本大会では、期日までに原稿を提出するかどうかによって参加費を変化させた点が、一般的な学会とはことなっていた。

登録料は発表者からのみ徴収することに当初からきめていた。参加することが確実にわかっている発表者からのみ徴収することにすれば、事前に PayPal ですべての支払いが終了する。当日の受付では、お金に気をとられる必要がなくなり、無用の混雑をさけることができる。

当日に聴講するだけの参加者からも徴収すれば収入が増加することはわかっていた。しかし、本大会では受付を簡素化する方針であるから、参加費徴収によって手間をふやすことはさげなかった。京都大学周辺の学生や関係者に、自由に聴講してもらいたいということも、登録料を発表者に限定した理由であった。

発表者のみから参加費を徴収するとして、共著者からも徴収するのか、一人で複数の発表をする発表者に対してはどうするのか、という問題もあった。本大会では、国際学会としては格安の参加費であることを考慮して、共著者からも参加費を徴収し、複数発表者に対しては発表の数だけ参加費をはらっていただくことにきめた。一人でいくつも発表することを制限し、できるだけたくさんの人に発表していただきたいとかがえていた。

ところが、この決定については、原稿提出締切まで十日ほど前になって、苦情がよせられることになった^{注17}。共著者からも登録料を徴収するということは、第一回案内のときからくりかえし周知してただけでなく、大会 Web ページでも明記してあることである^{注18}。苦情に対してこちらの原則を主張しつづけることで大会運営に支障をきたすことはさげたいとかがえ、共著者から登録料を徴収するという方針は撤回した^{注19}。

3.3.1.2 懇親会費

登録料収入のほかに、懇親会費の徴収は当初から予定していた。事前に Google Form でアンケートをとり、懇親会費がいくらならば参加するかを確認した。5000 円程度ならば参加するという人が一番おおかったので、5000 円での開催を目標とした。懇親会費についても、事前に

^{注17} 「共著者からも登録料を徴収するような学会はきいたことがない」とか「商売目当てのろくでもない学会だ。非常に不愉快だ。こんな学会には参加せず、ボイコットをよびかける」などという意見があった。

苦情メールを直接おっけてきたのは、大会に登録していた 80 人ほどのうち 2 人である。本大会には、学会の性格からして、臨地調査をしている参加者がおおい。臨地調査には予期せぬさまざまな困難がともなう。そのような困難に対する経験や耐性のある参加者がおおいおかげで、ほとんど苦情がよせられなかったのではないかと筆者はかがえている。

^{注18} 案内状や学会 Web ページにかいたところで、よまない参加者が一定数あることは予想していた。しかし、よまないことを棚あげして、苦情のみをいってくる参加者がいるとは予想していなかった。

^{注19} 現在の日本言語学会における大会参加費徴収方法からすれば、共著者であっても、大会に実際に参加するかぎりには参加費をはらう必要がある。したがって、事実上は共著者からも参加費を徴収しているようなものである。また、筆者が経験した学会のなかには、たとえば日本エスペラント大会のように、実際に会場に足をはこぶことなく「不在参加」という名目で「不在参加費」をしはらうような制度がある学会も存在する。したがって、参加しない発表者から登録料という名目でお金を徴収するとしても、問題にはならないとかがえていた。

筆者の立場は説明してはみたけれども、苦情をよせてきた 2 人が理解したかどうかは不明である。ただし、最終的に発表をとりさげるにはいたらなかったのも、共著者からの登録料徴収撤回にはそれなりの成果はあったようにおもわれる。

なお、苦情をよせてきた 2 人が実際に会場にくることはなかった。

PayPal で送金していただくことにした^{注20}。

最終的には、後述する各種助成金をいただくことができたので、懇親会開催にも余裕をもってとりくむことができた。

3.3.1.3 助成金

すでにのべたとおり、本大会は少額の大会登録料のみで運営することを方針としていた。各種助成金がなくとも運営できる方法をかんがえていた^{注21}。

他方、助成金を獲得することによって、基調講演者の旅費・滞在費、学生やポスドク参加者への支援等が可能になることから、助成金に申請すること自体は当初から計画していた^{注22}。

本大会では鹿島学術振興財団、京都大学教育研究振興財団、京都文化交流コンベンションビューローの三団体に申請した。申請するからには採択されることをめざした。団体によって審査基準に相違はあるけれども、(1) 開催の実現可能性がたかそうであること、(2) これまでに日本で開催されていない大会であること、(3) 若手研究者に配慮していること、といった三点が重視されているようであった。

申請にあたり、(1) については、発表予定者の名前だけでなく発表題目まで明記した。(2) については、日本での開催は 25 年ぶりであり、その間チベット・ビルマ語研究がさかんになっているということを強調した。(3) については、若手研究者に対する京都宿泊補助をうたった。

申請した三団体すべてから助成金をいただくことができたのは望外の結果だった。鹿島学術振興財団の助成金 (50 万円) には 2018 年 1 月末に申請し、3 月末に採択通知をいただくことができた。京都大学教育研究振興財団の助成金 (100 万円) には 2018 年 4 月なかばに申請し、6 月なかばに採択通知をいただくことができた。京都文化交流コンベンションビューローには『小規模 MICE 開催支援助成金』(最大 20 万円) と『京都らしい MICE 開催支援補助制度』(最大 30 万円) というものにと申請した^{注23 注24}。

^{注20} ただし、懇親会当日に参加を希望した参加者も複数おり、会場で参加費を徴収した。そのような人がいることも予想して、人数には余裕をもって予約していた。

^{注21} 助成金の問題点は、開催数ヶ月前まで採否がわからないので、予算をたてにくいということである。科研費等であれば、そのような問題はない。しかし、国際学会開催のために科研費をつかいたくはなかった。

^{注22} 科研費に代表される研究費を利用して学会を開催するということがしばしばおこなわれている。しかし、海外での臨地調査や文献資料の購入など研究そのもののために使用できるはずの研究費を、学会開催にかかわる諸経費に対して使用するということが、筆者はしたくなかった。そのため、国際学会に限定した助成金の存在は貴重であり、採択の可否がわからないという問題はあるけれども、各種助成金への申請は当初から計画していた。

^{注23} 「MICE (マイス) とは、Meeting (ミーティング、会社の会議等)、Incentive (Travel) (インセンティブ (トラベル)・報奨旅行等)、Convention (コンベンション・国際会議等)、Exhibition/Event (イベント/エキジビション・博覧会等) を総称した用語のこと」である (九鬼令和「MICE の振興について」による)。京都文化交流コンベンションビューローでは、ほかにも開催規模に応じて複数の助成金制度がある。詳細は京都文化交流コンベンションビューローの Web ページを参照。

^{注24} 京都文化交流コンベンションビューローの助成金については、申請手続き等が煩雑であると感じられたことから、当初は申請する予定がなかった。だが、2018 年 4 月 2 三日に京都大学で開催された京都文化交流コンベンションビューローによる「学術集会 誘致・開催のための助成プログラム説

京都文化交流コンベンションビューローからの助成金は、大会終了後に大会報告をおこない、その後査定された上で支給されるという点に注意が必要である。つまり、大会終了後にならないと使用できないという不自由さがある。さらに、『小規模 MICE 開催支援助成金』については、採択決定時に通知された補助予定金額が、大会の成否によっては減額される可能性がある。本大会のばあいは、参加人数を慎重にみきわめた上で、2018年7月下旬に申請し、8月下旬に採択が決定した。大会終了後に報告し、査定をうけた上で、採択通知に記載されていた金額を満額受領できたのはさいわいであった^{注25}。

なお、助成金申請にあたっては、申請団体の公印が必要となるばあいがある。本大会では、京都文化交流コンベンションビューローへの申請で必要となった。本大会のばあい、常設の事務局があるわけではないので、筆者が個人的に大会名義の印鑑を作成した。大会用の印鑑は、助成金申請だけでなく、後述する招待状の作成に際しても必要になる。したがって、大会開催を決定したら、はやい段階で印鑑を作成するのがよい。

3.3.2 支出

当初予定していた支出は、大会期間中のアルバイト代と雑費だけであった。しかし、各種助成金がいただけるようになったことで、さまざまな変更があった。

最終的には、おおよそ以下にしめすような項目が支出の対象となった。

1. 基調講演者の旅費と宿泊費
2. 学生およびポストク等に対する宿泊費補助
3. 会場費
4. 託児サービス
5. ポスター等デザイン費
6. アルバイト代
7. 懇親会関連費
8. 大会記念品
9. 雑費

3.3.2.1 基調講演者の旅費と宿泊費

本大会では予算の制約から、原則としては旅費も謝金もなしでひきうけてくださる人に基調講演を依頼した。Matisoff 教授と台湾・中央研究院の孫天心教授はこの条件でひきうけてくだ

明会」に参加し、方針を変更した。特に京都大学学術研究支援室の神谷俊郎氏による助成金活用の事例紹介のなかで、「京都らしい MICE」助成金で芸舞妓さんを懇親会に招待可能であるとしたことができたのが決定的だった。

^{注25} 『小規模 MICE 開催支援助成金』として 12 万 5 千円、『京都らしい MICE 開催支援補助制度』では約 24 万円の支援をいただくことができた。

さった^{注26}。Matisoff 教授はアメリカ、孫教授は台湾であるから、もう一人はヨーロッパから誰かに依頼することにした。できれば漢語の専門家または女性研究者に依頼したかったけれども、適当な知人がいなかったため、ロンドン大学の Justin Watkins 教授に依頼した^{注27}。Watkins 教授は、旅費がある程度補助されるならばという条件で、ひきうけてくださった。

当初は旅費も謝金もなしという条件でおひきうけいただいた Matisoff 教授と孫教授であったけれども、のちに助成金をいただくことができたので、このお二人の旅費等を完全にお支払いできたのはありがたかった^{注28}。Watkins 教授については、東京外国語大学の頭脳循環プログラムにより来日が可能となり、京都での学会参加中の滞在費もふくめて全額負担していただけることになった^{注29}。

結果的に基調講演者全員に旅費等の支給が可能となったことは幸運であった^{注30}。

3.3.2.2 学生およびポスドク等に対する宿泊費補助

助成金申請が採択されたことにより、学生やポスドク、南アジアからの参加者に対して大会期間中の宿泊費補助をおこなうことができた。具体的には、京都大学芝蘭会館や京都大学清風会館の部屋を予約し、こちらから宿泊費をしばらくすることにした。大学等から金銭的援助をうけていないことを条件として宿泊助成金希望者を募集したところ、国内外から 13 人の希望者があり、全員に補助することができた^{注31}。

宿泊補助希望者には中国籍の学生がおおかった。彼らの中には鈴木博之氏（オスロ大学・国立民族学博物館）の共同研究者がいたこと、鈴木氏自身も京都大学清風会館に宿泊予定であっ

^{注26} Matisoff 教授は第一回大会からほぼすべての大会に参加している国際漢蔵語学会の事実上の主催者である。Matisoff 教授はおそらく半数以上の大会で基調講演をおこなっている。Matisoff 教授の講演をたのしみにしている参加者もおおい。Matisoff 教授は学生時代に国際基督教大学（ICU）に留学していたこともあり、日本語に堪能であることも、依頼しやすい理由であった。孫天心教授と筆者にはエスペラントが趣味という共通点がある。孫教授との事務連絡は、大半をエスペラントですますことができた。

^{注27} Watkins 教授は、2008 年にロンドンで開催され筆者も参加した第 41 回国際漢蔵語学会の主催者である。また、2017 年 5 月にビルマ・ヤンゴンで開催されたビルマ語集中講座の講師でもあり、受講していた筆者にとっては先生にもあたる。そのような縁から、Watkins 教授に依頼することにした。

なお、Watkins 教授は学生時代に英語教師として大阪に一年滞在した経験があり、日本語もすこしご存知であった。日本は実に 25 年ぶりの訪問ということであった。

^{注28} Matisoff 教授の旅費については、国立民族学博物館の長野泰彦教授から科研費による招聘も可能であるとの申し出もあった。Matisoff 教授は長野教授の指導教授であるという事情もあった。だが、本大会では鹿島学術振興財団からの助成が 2018 年 3 月に決定していたので、長野教授の科研費を使用することはなかった。

^{注29} 東京外国語大学の頭脳循環プログラム担当の塩原朝子准教授と岡野賢二准教授に感謝する。

^{注30} 全体の予算のうち基調講演者にかかわる部分が助成金のおよそ半分をしめた。定職があり、金銭的にも余裕がある（はずの）研究者に助成金をつかうよりは、そうではない研究者にこそ助成金をつかうべきであったとも、今にしておもう。もしもふたたび国際学会を開催する機会があれば、基調講演者にかかる金銭的余裕があるなら、南アジアや東南アジアの研究者を招待するような方向で検討したい。

^{注31} 希望者の中には学生でもポスドクでもないにもかかわらず「お金がないから」という理由で申請してきた教員等もいた。そのような参加者は本来は補助の対象外ではあるけれども、黙認した。

たことなどから、鈴木氏に應對や連絡を依頼した^{注32}。

3.3.2.3 会場費

会場については、京都大学の教員であれば誰でも利用可能な講義室を一年前から予約していた。京都大学の教員が主催するということで、教室使用料は無料であるときいていた。ところが、2018年3月末に鹿島学術振興財団の助成金交付が決定したさいに会計掛に相談にいったところ、学会開催は学会の仕事であるという理由により、会計処理をひきうけていただけなかった。必然的に、京都大学の教員が主催するということではなく、あくまでも学会が主催するものである、ということになってしまった^{注33}。

その結果、当初は予定していなかった教室使用料が発生することとなった。だが、調査の結果、京都大学の講義室のおおくは、教室使用料さえはらえば、誰でもかりることができる（らしい）ということがわかった。教室使用料は床面積によって京都大学で一律にきまっているということもわかった。料金は、たとえばキャンパスプラザ京都で教室をかりることと比較して、むしろ安価であるということもわかった。

当初予約していた講義室は京都大学吉田本部構内にあり、文学部に研究室がある筆者にとって便利ではあった。しかし、二階にエレベーターでいくことができず、車椅子用のトイレもない建物であり、バリアフリーの観点からは失格であった。

結局、吉田南キャンパスの吉田南総合館北棟にある比較的あたらしい講義室をかりて開催することに決定した。すべておなじ階にある講義室で大会を開催し、エレベーターも車椅子用のトイレもあることが決め手となった。車椅子の参加者はいなかったけれども、高齢者やベビーカーを使用する参加者がいたこともかんがえると、バリアフリー対策ができていない施設を使用してよかった。吉田南総合館北棟にはベルラウンジとよばれるフリースペースもあり、大会参加者が休憩したり歓談することも無料で可能であることもさいわいした。

吉田南総合館の難点は、建物内での飲食が原則禁止という点であった^{注34}。すなわち、休憩時間に飲み物や軽食を会場でとることはできなかった。この点に不満がある参加者もいたようではある。しかし、軽食を提供する手間と費用をはぶくだけでなく、ごみを始末する必要もほぼなくなったので、飲食禁止の会場であることはむしろ好都合だった。

^{注32} 具体的には、深夜に到着する参加者に対する鍵のうけわたしなどを依頼した。

^{注33} 京都大学白眉センターに相談したところ、白眉センターが管轄する教室であれば、無償でかしていただけるということであった。しかし、本大会を開催するには、白眉センターの教室は手狭であったので、おかりすることはなかった。教室を無償で利用できるかどうかは、所属機関の裁量に依存する面もあるようである。もしも筆者が、たとえば文学部の専任教員であったとしたら、文学部の教室を無償でかりることもできたかもしれない。

なお、学会は学会が主催する活動であって、筆者の京都大学教員としての活動ではないと会計掛からいわれた。そこで念のため、大会期間中は有給休暇を取得して運営にあたった。

^{注34} 原則禁止であるはずにもかかわらず、ベルラウンジには自動販売機があり、外から食べ物を持ちこみ飲食している一般学生も散見された。

3.3.2.4 託児サービス

本大会は低予算であるから託児サービスはかんがえていなかった^{注35}。

しかし、のちに託児サービスを希望する参加者がでてきた。さいわいにして助成金が採択されていたので、京都にあるアルファコーポレーションに依頼することにきめた。最終的には2名の幼児に対する託児サービス料と託児用の教室使用料を合計して、三日間で20万円以上かかった^{注36}。低予算の学会にとってはおおきな出費であるけれども、若手研究者支援という観点からは有意義な出費であった。

3.3.2.5 ポスター等のデザイン

助成金申請が採択されたことにより、ポスターとランチマップをプロに依頼して作成していただくことができた。

大会用のポスターは京都大学白眉センターの行事でときどきポスター作成をしているアダチ・デザイン研究室 <https://www.adachi-design-lab.com/> (最終確認 2018年11月17日) に依頼した。ポスターは関係者に送付し、研究室の前などに掲示して宣伝していただくように依頼したほか、大会当日には会場の入口に掲示しておいた。

会場周辺のランチマップについては京都大学言語学研究室の卒業生であり、イラストが上手なワンプラディット・アパサラさんに作成を依頼した。本大会だけでなく、京都大学周辺で将来おこなわれるであろう学会でも必要に応じて利用していただけるようなものを作成するようこころがけた。ただし、本大会では紙資源の節約という観点からランチマップの印刷をしなかったもので、これを実際に利用した参加者ほとんどいなかったようである。

3.3.2.6 アルバイト

大会期間中のうち、本会議が開催された三日間については、京都大学言語学研究室の大学院生であるワットクンプ・テロさんにアルバイトを依頼した。具体的には受付と託児サービス業者の人への通訳をおねがいをした。このほか、参加者からの急な依頼^{注37}にも協力していただいた。

3.3.2.7 歓迎会

複数の助成金がいただけたことにより予算に余裕ができたので、大会初日の映画上映会のあとで、簡単な歓迎会をおこなうことにした。京都大学本部構内のカフェ・カンフォーラの一部をかりきって、軽食と飲み物を提供した^{注38}。

^{注35} 託児サービスはいくらかかるか、日本言語学会で担当経験がある内藤真帆氏(愛媛県立医療大学)におたずねしたところ、二日で10万円はかかるということであった。登録料だけでまかなえる範囲をこえているので、託児サービスについては案内状でもWebページでもふれずにすまっていた。

^{注36} 日本言語学会で託児サービスにもうしこむと一人につき一日500円をはらうことになっている。だが、本大会では、無料で託児サービスを提供することにした。

^{注37} 日本のコンセントに対応する変換プラグ購入を希望した参加者について、大学生協まで案内してもらおうなど。

^{注38} 10月になって、おなじ会場で、おなじような規模で、京都大学白眉センターによる第9期白眉研究者歓迎会がおこなわれた。本大会での歓迎会とはくらべものにならないほどしっかりした料理が提

3.3.2.8 懇親会関連

京都文化交流コンベンションビューローからの「京都らしい MICE」助成金がいただけたことにより、懇親会に祇園から芸舞妓さんを招待するとともに、京都の地酒による鏡割りをおこなうことが可能になった。また、旧知の篠笛奏者である森田玲・香織夫妻に依頼して、会場で演奏していただくことにした。

会場は、京都大学時計台の国際交流ホールの一室をかりきった。会場については、懇親会そのものが2時間だとしても、準備と片づけのための時間も必要である。本大会では、前後に1時間の余裕をみて、4時間かりることにした。

料理は時計台のレストラン「ラ・トゥール」に立食形式のものを依頼した^{注39}。

3.3.2.9 大会記念品

京都文化交流コンベンションビューローからの助成金がいただけたことにより、京都伝統産業ふれあい館に大会用のカバンを注文することができた^{注40}。大会のあとでも日常的につかいやすいように、デザインは簡素なものとした。学会名は「ICSTLL51」というちいさなタグがあるだけのものにとどめた。

予算に余裕ができたので、京都大学ならではのおみやげとして、「時計台クリアファイル」と「素数ものさし」を提供することにした。

また、基調講演者には「西夏文字 T シャツ」をおみやげとしてさしあげるとともに、基調講演時には着用してもらうように依頼した^{注41}。

3.3.2.10 雑費

雑費のうち主なものは次のとおりであった。

1. 大会用印鑑作成費
2. 海外への招待状郵送費 (EMS 費)
3. ポスター印刷費

供されていた。本大会では一人 1500 円ほどの予算であったのに対して、白眉センターの歓迎会は一人 3000 円ほどということであった。一人 3000 円あれば、そこそこのものをだしてもらえということがわかった。

^{注39} 中野 [発表年不明] によれば、懇親会の料理はあまりがちであるから、参加者全員分の料理をだしてもらうのではなく、八割程度でよいのではないか、ということであった。本大会のばあい、基調講演者などの招待参加者とその家族については懇親会費を請求しなかった。そのかわり、一般参加者の人数分だけの料理を用意してもらった。結果的に、料理はすこしたりなくなるくらいであった。しかし、篠笛や芸舞妓、鏡割りがあったおかげで、参加者の満足度は非常にたかいものであったようである。

^{注40} 当初はカバンを注文するつもりはなかった。しかし、みやこメッセにある京都伝統産業ふれあい館にいて現物を確認してみたところ、機能性にすぐれ、デザインもうつくしいものであったので、注文することにした。

^{注41} Watkins 教授には「サイズがあわない」という理由で着用していただけなかったけれども、Matisoff 教授と孫教授は着用して講演してくださった。

4. ポスター発表用レンタルパネル費
5. PayPal 手数料
6. 事務用品費

3.3.2.11 税金対策

支出にかんして気がかりだったのは、税金である。学会運営は非営利事業であるから、大会登録料や懇親会費に課税されることはない。他方、基調講演者に対する旅費やアルバイトに対する謝金は課税の対象となる。

当初は税金もふくめて筆者が自分で処理する方針であった。そこで、左京税務署を訪問し、外国人に対する租税条約上の納税方法やアルバイト謝金にかんする納税方法について説明を受けた。説明を受けたところ、納税自体はそれほど煩雑なものとはおもわれなかった^{注42}。しかし、さいわいにして複数の助成金をいただくことができたので、外国人に対する旅費やアルバイトに対する謝金など、税金関係のてつづきはすべて業者に依頼することにした^{注43}。それほど煩雑ではないとはいえ、ほぼすべての準備を筆者ひとりがおこなっており、こまかな不手際もあったことをおもうと、比較のおおきなお金の処理の一部を業者に代行してもらえたのは本当にたすかった。

3.3.3 会計

収入と支出の管理のため、フリーの会計ソフトを利用した。最近はクラウド型のものがおおいようである。だが、本大会では高機能は必要ない。Dropbox で共有でき、操作が簡単である「記帳風月」というソフトを利用した。このソフトは開発もサポートもすでに終了しているのが難点といえるけれども、本大会の会計処理では問題とはならなかった。

3.4 Web ページ作成

大会 Web ページについては、Google Sites を利用した。理由は、チベット=ビルマ言語学研究会や言語記述研究会の Web ページ作成を通じて、筆者がすでに利用方法を熟知していたことに

^{注42} 説明をうけてから数日後、税務署から書類がとどいた。第 51 回国際漢蔵語学会大会実行委員会という名目の団体に対する登録番号であった。この番号が、納税のさいには必要となる。11 月には納税に必要な書類もとどいた。必要な情報を記入して提出することは、それほど面倒なことではなかった。

^{注43} 本大会のばあい、業者に対して実費の一割を手数料としてしはらうことで、すべての業務を代行していただけた。予算に余裕があるばいには、学会業務を代行してもらえる業者に依頼することで、会計処理の手間を大幅にへらすことができる。また、財団法人からの助成金を利用してこのような業者に業務を依頼するばあいには、大学等の会計掛をとおすよりもさまざまな面で融通がきくのもよい。本大会のばあい、基調講演者の Matisoff 教授は学会の前後に一週間ずつ日本国内の観光を予定しておられた。もしも科研費等で招聘していたとしたら、そのような旅程は到底みとめられなかったはずである。

くわえ、無料で利用できるからである^{注44}。また、参加者の登録には Google Form を利用した。無課金で複数の項目について情報をあつめることができるからである^{注45}。Google のサービスを利用すると中国から閲覧できないという批判があることは承知していた。しかしながら、プロクシーサーバーや香港 SIM カードを利用することなどによって、中国からでも閲覧できないわけではない^{注46}。結果的に、中国本土からの参加者は 5 人であった。これは、中国本土以外で国際漢蔵語学会が開催されるばあいの数字としては、むしろおおいほうである^{注47}。

Google Sites ではアップロードできるファイルの容量に制限があるので、大会用に Dropbox のアカウントも取得し、案内状や予稿集などのファイルは Dropbox へのリンクをはることで対応した。Dropbox も中国からは利用できない。しかし、大会参加者は京都の宿などでダウンロードできるのでおおきな問題にはならないとかがえた。

3.5 EasyChair の利用

本大会では学会運営補助サービスである EasyChair を利用した。EasyChair は、無料機能であっても、発表要旨の受付や査読、登録者へのメール一斉送信機能などを利用することができる。有料機能では学会プログラムの作成等も可能となる。ただし有料機能を利用するためには高額の使用料が必要である。使用料は発表申込数によって変動するために、事前に申込者数をそれなりに予測する必要もある。本大会への申込人数は 50 人から 200 人程度と予想してはいたけれども、確証があるわけではなかったの、本大会では無料機能のみを利用することにした^{注48}。

EasyChair を利用するには、学会が実際におこなわれるものであることをしめす必要がある。そのためには、事前に簡単なものでよいので Web ページを作成するほか、おおよその大会開催日時を確定しておく必要がある。

3.6 日程の調整

本大会では、予算の制約から、京都大学で教室をかりることを計画していた。学期中は教室をかりることはできないので、開催は必然的に 8 月または 9 月となる。また、学会開催のために

^{注44} 無料で作成可能な Web ページサービスとしては Wix などもある。ただし筆者は利用したことがなかったの、本大会でも利用しなかった。なお、第 29 回東南アジア言語学会の Web ページは Wix で作成されたけれども、倉部慶太氏によると、Wix は環境によっては使用できないこともあるそうである。

^{注45} Google Form と類似したサービスとしては Jot Form もある。ただし Jot Form のばあい、無料で利用できる機能に制約があるので、利用しなかった。

^{注46} 中国人参加者には査読の問題もある。Google をのりこえて手続きができるような人であれば、査読手続きも問題なくできるであろうという期待もあり、あえて Google を利用したという面もある。
なお、4 月に孫天心教授の提案で、中国社会科学院の黄成龍教授のブログで学会について情報を適宜公開していただいてはどうかという話がでた。そこで筆者から黄教授に依頼したけれども、返事はなかった。

^{注47} ちなみに中国本土で開催されるばあい、中国人参加者だけで 200 人をこえることが通例である。

^{注48} 実際には 90 人程度のもうしこみであった。

土日祝日があてられる風潮はよくないと筆者はかんがえているので、平日の開催ときめていた。

筆者としてはできるだけはやく大会関係の雑務から解放されたいので、当初は8月の開催を希望していた。しかし8月は酷暑が予想されるので反対の声もおおかった。そこで9月最終週の平日に開催することで妥協した。

2018年は6月に地震、7月に豪雨、8月は酷暑、そして9月は台風というように、自然災害にふりまわされた。特に9月の台風の被害はおおきく、関西空港が一時閉鎖においこまれた。さいわいにして、関西空港は予想よりもはやく復旧したために、学会開催への影響は最小限ですんだ。大会期間の前後にふたたび台風がきたけれども、大会期間中は台風におそわれなかったのは、不幸中のさいわいであった^{注49}。

結果論ではあるけれども、会場費をはらって開催するならば、京都大学時計台の会議室であるとか、大学の外でホテルや会議場をかりてもよかった^{注50}。酷暑や台風の心配がない季節に開催することをかんがえるべきであった。

3.7 PayPal 口座開設

本大会では、登録料はPayPalを通じて徴収すると最初からきめていた。他人に請求書をおくったり、他人からの送金をうけとるにはPayPalのビジネスアカウントを取得する必要がある。筆者はすでにビジネスアカウントを取得していたので、新規に口座を開設する必要はなかった^{注51}。口座名義については、学会名義に変更することも簡単にできた^{注52}。

PayPalでは、大会WebページにPayPalのバナーをリンクして、参加者各自に自分でログインして送金してもらうことが一般的であるとおもわれる。しかし、本大会ではWebページにPayPalのリンクをはずし、筆者が参加者に直接請求書をメールするという方法をとった。このようにした理由は、予稿集用の原稿を提出した参加者だけから登録料を徴収したかったからである。逆にいえば、予稿集の原稿をだしていない段階で登録料だけをうけとることはさげなかった^{注53}。逐一メールするのは煩雑にみえるかもしれない。しかし、実際にはそれほどの手間ではなかった。むしろ、各自で操作してもらうことによって生じうる問題^{注54}を回避するこ

^{注49} ただし、のちにきいたところでは、帰国のフライトが台風の影響でキャンセルされ、関西空港に宿泊せざるをえなかった参加者もいたそうである。

^{注50} もっとも、これらのホテルや会議場で開催するとなると、会場費が高額になる。予算がある学会であればともかく、本大会のような低予算の学会ではむずかしかった。また、ホテルや会議場で開催するとなると、大学の教室ほどには融通がきかなくなるほか、会場との各種やりとりが煩雑になることも予想される。

^{注51} PayPalのビジネスアカウントを取得するには本人確認書類を用意して申請すればよい。筆者のばあいは住基カードを使用した。

^{注52} 本大会開催のための準備期間から大会終了までのあいだ、筆者のPayPal口座の名義は“ICSTLL51”と変更していた。そのため、この期間にPayPalを通じて他の国際学会の参加費を送金したとき、名義上はICSTLL51からの送金と誤解されることがあった。

^{注53} ただし実際には、延長締切での登録料である1万円については、原稿提出よりもさきに送金してもらった。その結果、1万円の登録料は送金したけれども原稿はださない発表者が3名いた。

^{注54} PayPalのつかいかたがわからない、所定の登録料をはらわない、原稿をださずに登録料だけらはら

とのほうが重要であるとかんがえた。

3.8 銀行口座開設

非営利かつ小規模の大会運営では、銀行口座開設は必須ではない。左京税務署に確認したところ、たとえ個人口座を使用したとしても、大会のお金とその他のお金との区別が明確であるならば問題ないということであった。

本大会では、すでに PayPal のビジネスアカウントを所有していたので、銀行口座開設の予定は当初はなかった。最初に決定した鹿島学術振興財団からの助成金うけとりでも、筆者の個人口座で問題ないということであった。

しかし、のちに採択が決定した京都大学教育研究振興財団からの助成金うけとりでは、学会名義の銀行口座が必要になった。そこで、京都大学構内に ATM があり、筆者の個人口座もある三井住友銀行京都支店で学会名義の口座を開設することにした^{注55}。

なお、学会名義というばあい、たとえば「第 51 回国際漢蔵語学会」という名義である必要はない。むしろ、個人名義でしか口座を開設することができないほうが一般的である。本大会では「第 51 回国際漢蔵語学会実行委員長藤原敬介」という名義で口座を開設した。このようにすることにより、口座開設に必要な押印は、個人印ですますことができた。

3.9 案内状作成

国際学会開催にあたっては、学会の開催日時や発表要旨の締切日、発表要旨の提出方法、大会登録料、懇親会などについて説明した案内状を作成する必要がある。

本大会では、2018 年 2 月に第 1 回案内、発表要旨の提出締切があった 2018 年 4 月に第 2 回案内、予稿集原稿の提出締切があった 2018 年 7 月に第 3 回案内、大会開催直前に第 4 回案内をメーリングリストや大会参加者リストにメールで送信した。

本大会の運営は、これまでの大会とはことなる部分がおおいため、できるだけ丁寧に説明す

う、発表しないにもかかわらず登録料をはらう、懇親会費との混同など、いくつかの問題が予想された。

^{注55} 後に神谷俊郎氏からうかがった話によると、大会用の口座開設にあたっては、経験がある銀行に依頼するほうがよい。筆者は上述の理由により三井住友銀行京都支店に依頼はしたけれども、同支店は四条烏丸にあり、百万遍にある京都大学からはとおい。おそらくそのために、事務手続き上の不備が複数回発生し、余計な手間を数回かけさせられることになった。大会用の口座開設ということについて、経験がほとんどなかったようである。銀行口座を開設するならば、大学のちかくにあり、経験がありそうところで開設するべきである。

筆者の経験では、口座開設までに三回銀行を訪問した。初回の訪問では口座開設のための説明をきいた。二回目は必要書類を記入し、関係書類を提出した。三回目に通帳とカードをうけとった。このうち初回と二回目については、事前に必要な書類を完全に用意することができるならば、一度ですますことも可能であるとおもわれる。具体的には、学会が実在するものであることをしめす客観的な書類と口座開設者の印鑑があればよい。学会の実在性をしめす書類としては、本大会のばあいは、第一回案内状の日本語訳（鹿島学術振興財団への助成金申請にあたり、作成していた）、発表予定者と発表題目の一覧表、学会 Web ページのコピー、そして鹿島学術振興財団からの助成金採択決定通知書を提示した。

ることをこころがけた。特に、発表者全員から登録料を徴収すること、そして予稿集作成のために原稿提出をもとめること、である。

しかし、結果論としては、丁寧に説明した（つमりの）ところで、そういう説明をよむ人はすくなくかった。案内状を丁寧にかいたところでよまれないということであれば、むしろ案内状はできるだけ簡素にかいたほうがよかった。大会開催日時、発表要旨の提出期限、大会登録料くらの情報があるだけでよいのではないだろうか^{注56}。案内状はできるだけ簡素にして、補足情報は Web ページで随時案内するというくらいでよいようにおもわれる^{注57}。

3.10 招待状作成

日本にくるために査証が必要となる参加者に対しては、日本大使館や日本領事館に提出する書類のひとつとして、招待状を作成する必要がある。

本大会では、中国とインドからの参加者のために、招待状を作成した。ただし、事務作業をできるだけ簡素化するために、査証が必要な参加者ができるだけすくなくなるような方策を講じた。すなわち、予稿集用の原稿の事前提出と、大会登録料の PayPal による事前支払いをもとめた。原稿を事前に提出し、PayPal で支払いをしてくれるような参加者ならば、査証てつづきも的確におこなってくれるだろうという期待があった^{注58}。

参加者の中には、査証目的ではなく、所属機関への出張手続きや旅費申請のために招待状を必要とする人もあった。

大会開催以前には、このような書類を作成することが、事務的に一番面倒であるとかんがえていた。だが実際にやってみると、書類作成自体はそれほど面倒なことではなかった。むしろ問題は、参加者の中には査証申請てつづきのことを理解していなかったり、てつづきを開始するのがおそかったりする人がいるという点であった。特に中国からの参加者については、海外渡航経験が豊富で手続きを熟知している参加者と、まったく何も知らない参加者とのちがいがおおきかった。本大会では、経験豊富な参加者がほかの参加者のために中国語で手続きを説明してくれたので、煩雑な説明をする必要がなくなり、ありがたかった^{注59}。

^{注56} 案内状をできるだけ丁寧にかくことにきめた背景には、2016年と2017年に中国で連続して開催された国際漢蔵語学会に対する個人的な不満もあった。この両大会では、Web ページがなかなか作成されない、作成されてもしばしば接続できない、接続できても必要な情報が掲載されていない、案内状がきても参加費がいくらになるかの情報すらない、プログラムが直前（ひどい時は当日）になるまで発表されない、などといったさまざまな問題があった。そのような運営はすべきではないという経験から、丁寧に説明しすぎたきらいはある。

^{注57} 2019年に開催が予定されている第29回東南アジア言語学会、第52回国際漢蔵語学会、第25回ヒマラヤ諸語会議、第24回国際歴史言語学会など各種国際学会においては、すくなくとも第一回案内送信時点においては、会費がいくらになるかを明示しているものはなかった。大会主催者としては、参加人数や各種助成金の獲得状況が確認できるまでは、情報をだしたくないということであろう。そして、そのことに対して参加者は不便を感じていたとしても、そのような情報がないという理由で応募をとりやめるほどのことにはなっていないとおもわれる。

^{注58} 聴講のみの参加者から登録料を徴収しないことにした背景には、登録料を徴収するならば招待状をださなければならなくなる可能性があり、それはさけたかったという面もあった。

^{注59} なお、こちらから必要な書類をおくったとしても、それがとどいたかどうかを連絡しない人や、査

筆者の分野では、日本で国際学会を開催するとなると、中国からの参加者に対して特別な対策が必要になる。中国事情にくわしく、中国語をしゃべっているような人から助力してもらえる体制があったほうがよい。本大会では、林範彦氏と鈴木博之氏にたすけられた。

3.11 メール対応

本大会では、大会専用のメールアドレスとして `icstll51@gmail.com` を用意した。パスワードは大会運営委員全員にしらせておいた。筆者が急病でたおれたり、何らかの事情で大会運営にたずさわれなくなる可能性を想定していたからである。ただし、結果的にはすべてのメール対応は筆者が一人でおこなった。

Web ページでは「なかなか返事がこないとしても、一週間は根気よくまってください」という注意がきをしておいた。多忙のなか大量のメールがきても、一週間あれば返信可能であると想定していた。実際には、それほどおおくのメールがくることはなかったこともあり、ほとんどすべてのメールに対して、24 時間以内に返信することができた。

大会開催以前には、メールでの対応も煩雑であることが予想された。しかし実際には、脚注 17 で前述した苦情に対する対応以外には、それほど面倒なことはなかった^{注60}。

メール対応での反省点としては、大会関係の一斉メールを送信しすぎた、という点をあげることができる。大会関係の必要な情報は案内状に丁寧にかいた（つमोरいの）ほか、Web ページも頻繁に更新して告知していた。それでも、EasyChair での登録方法からはじまり、発表要旨の提出方法、参加費の支払い方法、予稿集のあつかい等について、さまざまな誤解があった。何か誤解している人が一人でもいるたびに、潜在的な誤解者はさらにいる可能性があるとかんがえて、逐一補足説明のメールを一斉送信していた。これはかなり不評であったようである。

筆者としては丁寧に説明したいということではあったけれども、なにごとにも簡素にすますほうがよい。何か誤解している人がいたとしても、必要に応じて個別にメールするにとどめ、全体に一斉メールをおくることはやめるべきであった。

3.12 プログラム作成

3.12.1 基調講演

国際漢蔵語学会では、例年三人ほどの基調講演者がいる。大会は近年は通常三日間であり、毎日一人一時間ほどの基調講演があることが普通である^{注61}。基調講演は、通例にしたがい、本会議期間中に毎日ひとつおこなっていただくことにした。二日目の懇親会では会場を移動する

証を申請しても発給されたかどうかを連絡しない人が中国人を中心におおかった。

^{注60} 「メールに英語で対応するのは大変でしょう」という声をしばしばきいた。だが筆者のばあい、拙速を旨とする対応に徹した。すなわち、文法的なただしさであるとか、ただししい綴字であるとか、ふさわしい単語の選択であるとか、簡潔な表現であるとかいったことよりも、すぐに返事をするを第一にかんがえた。また、日本語で返事をして理解される参加者に対しては、たとえ英語で連絡があったとしても、日本語で返信することによって手間をはぶいた。

^{注61} ただし中国で開催されるばあいには、一人 15 分程度で一日に 5 人くらいの基調講演がおこなわれることもめずらしくない。

ので、その誘導が簡単になるように、一日の最後の枠に基調講演を配置することにした。このようにすることにより、同時帯に一部屋かりるだけですみ、会場費を節約することもできた。

基調講演については、京都大学オープンコースウェア (KUOCW) として公開することを計画した。これは、京都大学高等教育研究開発推進センターに申請すれば、無料で撮影・編集・公開をしてもらえるといるものである^{注62}。三人の基調講演者は、講演が KUOCW として公開されることを快諾して下さった^{注63}。

3.12.2 口頭発表

口頭発表の申し込みについては、まず要旨の提出をもとめた。要旨には、「例文と参考文献をのぞいて」500語という制約をもうけた。これは、「例文と参考文献は語数にかぞえない」という意図であった。しかし実際には、こちらの意図が通じず、「例文と参考文献はのせてはいけない」と理解した人がそれなりにいたようである。

要旨は EasyChair から PDF ファイルで提出してもらうことにした。EasyChair では、MS-Word などで作成した文書をコピペしてはりつけて提出することが一般的である（ような気がする）。PDF は、要旨とは別に、ハンドアウトを提出するために使用される傾向にある。本大会では、EasyChair の設定を変更し、PDF ファイルのみが提出できるようにした^{注64}。

だが、PDF のみの要旨提出は大失敗であった。もしも EasyChair にテキストファイルではりつけてもらうだけであれば、要旨集を簡単に作成することができた。しかし、PDF で提出してもらったために、簡体字と繁体字の処理だけでなく、さまざまな音声記号の処理にも手間がかかった。Unicode に対応している XeLaTeX を使用すれば簡単にできるとおもっていたけれども、XeLaTeX のあつかいになれていないこともあって、おもうようには編集できなかった。結局、作業があまりにも煩雑であるので、5割程度は完成していた要旨集ではあったけれども、作成は途中で断念することした^{注65}。ただし、予稿集のほうは比較的簡単に作成することができたので、要旨集の代用にはなったとおもわれる。

また、予稿集用の原稿提出は大会実行委員会に直接メールするように告知していたにもかかわらず

^{注62} 京都大学大学院人間・環境学研究科の藤田耕司教授が主催した第9回言語進化の国際会議の報告書が京都大学教育研究振興財団に掲載されており、そこで講演を KUOCW として提供できるということをした。

^{注63} 三人の基調講演のうち、2019年3月現在、Matisoff 教授と孫教授のものについては <https://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/international-conference/79/video> からのリンクで視聴することができる。Watkins 教授のものについても、準備ができしだい、公開される予定である。撮影から編集までご尽力くださった京都大学高等教育研究開発推進センターの藤岡千也特定助教と京都大学文学部地理学専修の高橋徹大氏に感謝もうしあげる。

^{注64} 筆者は LaTeX を常用している。LaTeX で作成した要旨をわざわざテキストファイルにして EasyChair にはりつける作業には以前から辟易していた。LaTeX での標準的な音声記号入力パッケージである TIPA を使用して作成した PDF からテキストファイルにすると、音声記号ではなくアスキーコードになってしまうため、あらためて音声記号に置換する必要があるからである。こうした個人的な経験から、PDF のみの提出をうけつけることにした。

^{注65} MS-Word に対する嫌悪と、LaTeX に対する執着がもたらした失敗である。多数の参加者がいる学会では、世間に妥協したほうが作業が楽になるという面があることを学習した。

ならず、EasyChair になれている参加者の中には、EasyChair に予稿集原稿の PDF を提出する人がいた。EasyChair では、要旨はコピペ、予稿集原稿は PDF で提出という方法が一般的である(らしい)からである。だが、このようにすると、本大会においては、最初に提出した要旨が上書き消去されてしまうため、不都合であった。

EasyChair を使用するさいには、一般的な使用方法にしたがったほうが、結局のところ手間がかからないということがよくわかった。

さて本大会のばあい、最終的に 86 件の発表申し込みがあった。採否の審査は筆者がほぼ一人でおこなった。審査基準は簡単なものとした。すなわち、目的と方法と結論と具体例が提示されてさえいれば、内容の妥当性は考慮しなかった。本大会では予稿集原稿の提出ももともとめているので、内容の当否については読者に判断してもらうこととし、すこしでもおおくの発表を受け入れることを優先した。上記の基準にてらして不採択候補となったものについては、ほかの大会実行委員にも意見をもとめ採否を決定し、最終的に 79 件が採択となった。ただし、その後 11 件がキャンセルされたので、実際の発表は 68 件であった。

なお、口頭発表は、日本語または英語でもよいということにきめた^{注66}。日本で開催するからには、日本語での発表は可能にすべきであるとかんがえたからである。しかし、実際に日

^{注66} 国際漢蔵語学会での発表は、中国以外で開催されるときには、ほとんど常に英語のみである。中国で開催されるときには、中国語による発表が多数ある。なお、Matisoff [2017: 3] によると、チベット語による発表も過去にはあった。漢蔵語学会というからには、チベット語で発表する権利も当然あるべきではあるだろう。

国際会議における公用語の問題については大津由紀雄研究室編 [2010: 4-5] に次のような記述がある。「多様な言語を母語とする人たちが集う国際会議であれば、公用語が必要となります。(中略) 会議の公用語が英語でなくてはならない必然性はありません。(中略) 英語という選択肢は大きな問題があります。それは、英語を母語とする人たちとそうでない人たちと [ママ] 間に不公平が生じるからです。その意味では、その言語を母語とする人がいない言語を会議の公用語とするのが理想です。エスペラントのような人工言語ならびつたりです。しかし、エスペラントの普及率を考えると、これまた現実的ではありません」。

なお、国際漢蔵語学会におけるフランス語の消長について、橋本 [1977: 33] は次のように記録している。「これは学問以外のことだが、国際語としてのフランス語の凋落ぶりを、これほど切実に感じさせた学会は、これまでになかった。ヨーロッパでひらかれ、仏語圏からの参会者もすくなくなかったのに、フランス語でおしとおしたのはオードリクール教授だけで、あとはフランス語ではじめて、途中から英語にスイッチするありさまで、シャバンヌ、ペリオ、マスペロの昔のことを多少なりとも又聞きしているわれわれは、ことに感無量であった」。オードリクール教授はフランス語での発表に徹していたようであり、藪 [1993: 34] には次のような報告がある。「オードリクール (André-George Haudracourt) 教授による、シナ語・ミャオ=ヤオ諸語・カダイ諸語について、最小限の言語事実の生起によってもたらされる最大限の言語変化の解釈に関する招待講演があった(講演はフランス語で行われ英語の通訳がついた)」。また、藪 [1995: 44] はパリで開催された大会の中で次のように報告している。「会議の使用言語は、フランスというお国柄から、かなりの部分がフランス語で占められるのかと推測していたが、豈に凶らずや、筆者の出席した作業部会・全体会議の分科会ではたった 2 つの例を除いてすべて英語であった(ちなみに、2 つの例外はチベット語と北京語による発表で、巧みな英語による通訳がついた; なお、配布資料にはわずかながらフランス語のものがあつた)」。筆者がしるかぎりでは、最近の国際漢蔵語学会でフランス語による発表がおこなわれたことはない。

本語で発表した人は留学生一名だけであった^{注67}。

3.12.3 ポスター発表

本大会での工夫は、口頭発表のほかにポスター発表も可能としたことである。国際漢蔵語学会の歴史の中でポスター発表がおこなわれたことはおそくない。

ポスター発表も可能としたのは、口頭発表希望者が多数にわたるばあいにはポスター発表にまわってもらうことで、口頭発表の場所と時間を確保したかったからである。中国からの参加者や、日本に留学している中国人大学院生からの発表申し込みが多数あると予想していた。

しかし、実際の申込みは8件のみであり、すべて採択となった。ただし、のちに4件がキャンセルされたほか、のこり4件のうち1件については、最後まで連絡がなく、大会登録料もしはらわれなかったため、最終プログラムからは削除した。最終的には3件のポスター発表になった。

ポスターをもちこぶのは荷物になるので、希望者には無料で印刷するとつたえた。3件のうち2件は印刷希望があったので、こちらで印刷した。

3.12.4 ワークショップ

国際漢蔵語学会では例年、本会議の前日にさまざまなテーマのワークショップがひらかれている。本大会でも、ワークショップ開催希望者をつのった。一件のもうしこみがあった。しかし、内容的に不適切であると大会運営委員で判断し、不採択とした。その結果、ワークショップは開催されなかった。これは、筆者がしるかぎりの国際漢蔵語学会では例外的なことである。

ワークショップは開催されなかったけれども、国際漢蔵語学会ではおそらくはじめてのこころみとして、映画を上映することにした。フランスを代表するビルマ学者である Denise Bernot 教授の研究人生をまとめた記録映画である *Denise Bernot : Langues, Savoirs, Savoir-faire de Birmanie* を、製作者の一人である Alice Vittrant 教授の好意により、上映することができた^{注68}。この映画はフランス語によるものであるけれども、英語の字幕つきのものを上映した^{注69}。

^{注67} 2018年の第50回国際漢蔵語学会の基調講演のうち、孫天心教授によるものと、Randy J. LaPolla 教授によるものとは、スライドは英語であったけれども、口頭発表言語は中国語であった。このような前例があったことも、日本語での発表をみとめる理由となった。

ところで、筆者も参加した2019年1月にカンボジアのシェムリアップで開催された第1回国際アジア言語人類学会でも、スライド等に英語を使用するのであれば、実際の口頭発表言語は自由であるという方針があった。しかし、筆者の見聞の範囲では、英語以外の言語で口頭発表していたことはなかった。あらゆる言語での発表を許容するというのはひとつの理想ではあるけれども、実際にそのように実行する人はいなかったということである。

^{注68} 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の星泉教授が中心になって制作された「チベット牧畜民の一日」(カシャムジャ監督)を2017年5月7日に十三の第七藝術劇場で鑑賞する機会があり、当日会場にきておられた星教授に本大会での上映可能性について打診した。しかしながら、さまざまな事情から上映はかなわなかった。

^{注69} この映画はインターネット上で Vittrant & Mersan [2016] として公開されている。ただし、そちらはフランス語版のみのようである。また、日本語訳と訳注は川上・藤原 [2018] で公開されている。

3.12.5 プログラム発表

本大会では、大会二ヶ月前にはプログラムを公開することを目標としていた。

2018年4月の発表要旨締切後すぐに、発表者と発表題目一覧をまず公開した。2018年7月の予稿集原稿提出締切後には、仮プログラムも公開した。仮プログラムでは、提出された原稿にもリンクをはって、ダウンロードできるようにした。

1万円の参加費をはらうことに同意した参加者については2018年9月に原稿の締切を設定したために、最終的にプログラムが確定したのは大会一週間前となってしまった。ただし、7月に公開した仮プログラムとほとんど変更がなかったため、参加者にとって不利益はなかったとおもわれる。

プログラム作成にあたっては、事前に Google Form で登録してもらうときに、発表希望日時も記入してもらうようにした。司会を依頼してもよいかどうかについても、Google Form で記入してもらった。

本会議の口頭発表は発表者の希望日時を最優先とし、関連する言語または地域ごとにセッションをまとめて、プログラムを作成した。司会者は、各セッションの言語について造詣がふかい人に依頼するように配慮した。中国人がおおいセッションでは、中国語をしゃべっている日本人に司会を依頼するようにした。

プログラム作成では、近年の日本言語学会にならひ、発表と発表の間に5分の移動時間をいれるようにした。この5分があったおかげで、プログラムは順調におこなわれることになった。管見のかぎりでは、国際漢蔵語学会では初のこころみである^{注70}。今後の国際漢蔵語学会でも、今回のこころみが継続されることを期待している。

3.13 予稿集作成

国際漢蔵語学会は、初期においては、参加者全員が原稿を事前に配布し、それをもとにひとつの会場で討論がおこなわれていた^{注71}。しかし、学会がおおきくなるにつれ、複数の会場で同時

^{注70} 筆者の経験の範囲では、国際漢蔵語学会にかぎらず、国際学会においてプログラムの間に5分程度の移動・休憩時間をいれているところはほとんどない。

^{注71} “As with the first meeting, an effort was made to circulate the papers in advance of the conference. In principle each participant was merely to give a brief summary of his paper (which his colleagues had presumably had time to read in advance), after which the paper would be thrown open for general discussion” [Matisoff 1973: 153]、「研究発表者は事前にその論文の全文を委員会に提出する事が義務づけられており、委員会はそれらの論文を全部複写して、参加者の全員にあらかじめ郵送して置く」[橋本 1970: 61]とか「一般発表に関しては一貫して守られてきた伝統がある。それは、学会発表ではディスカッションを最重要視するという点である。このため、発表者にはあらかじめ参加者名簿が郵送され、各人の責任で自分の発表要旨やハンドアウトを参加者全員に配布しておかなければならない。これを怠ると当日発表できない」[長野 1993: 64]という報告がある一方で、「この学会のいいところは（中略）事前にペーパーの全文を参会者に配布しておいて、大会はその討論から始める（ことになっている）ところにある。今回の大会は（中略）最終的には22篇のペーパーになったが、このうちで全文が事前に筆者の手に届いたのは、たったの7篇丈であった」[橋本 1975: 25]という記録もある。

に発表がおこなわれるようになった。配布資料を用意する参加者もすくなくなっていた。現在では、配布資料なしで、パワーポイントやキーノートによるスライドでの発表が主流となっている^{注72}。筆者の経験では、スライドのみの発表では、例文を確認する余裕がなく、発表をよく理解することができない。また、非母語話者にとっては、もともと資料がないまま英語の発表をききつづけるのは苦痛でもある。

そこで本大会では、事前に予稿集を作成することにした^{注73}。ただし、予稿集といっても、ページ数や体裁に制限はもうけなかった。スライドを PDF ファイルにしたものやハンドアウト程度のものもうけつづけることにした^{注74}。基調講演をふくめて全部で 71 あった発表のうち 63 の発表について事前に原稿が提出された^{注75}。提出された原稿はひとつの PDF ファイルにまとめて予稿集とし、大会 Web ページで公開した。予稿集は最終的には 1085 ページになった。

本大会では紙媒体はいっさい印刷しない方針であり、必要に応じて予稿集のファイルを事前にダウンロードするように告知してはいた。だが、会場で予稿集を参照しながら聴講している参加者はほとんどいなかった^{注76}。それでも、予稿集を公開しておけば、会場にこられない研究者も参照することができるので、予稿集作成自体は決して無駄なことではないだろう。なお、本大会終了後、京都大学学術情報リポジトリでも予稿集は公開されるようになり、各論文に対して Permalink も付与されるようになった^{注77}。

注72 “Nowadays our conferences have grown enormously, to the point where several hundred participants are often involved. There are naturally many simultaneous sessions, so that it is impossible to get complete sets of the papers. And in fact technological advances like PowerPoint have largely replaced printed handouts, so that many presentations leave nothing tangible behind. There is no question of reading anybody’s paper in advance, unless it has been sent out electronically.” [Matisoff 2017: 2]

注73 過去の国際漢蔵語学会では、何度か予稿集が出版されている。ただし、予稿集とはいっても、大会のあとに出版される Proceedings であり、大会期間中に参照できるものではない。

注74 雑誌によっては予稿集に掲載された原稿の投稿をみとめないものがある。したがって、予稿集への原稿提出をもとめるべきではない、という意見もあった。だが、予稿集に掲載された原稿の投稿をみとめる雑誌も、多数存在する。だから、予稿集への原稿提出をもとめることが、参加希望者の不利益になるとはかんがえなかった。

注75 期日までに提出されなかった原稿は、3 件の基調講演のうち 2 件と、翌年の主催者による発表ということで特別に配慮した 4 件の発表、そして 1 万円の参加費をはらうことで締切を延長した 15 件の発表のうちの 3 件である。特別あつかいをはじめると、さまざまな例外が生じるという例である。

注76 実際のところ、ほぼすべての論文が事前に印刷配布されていた初期の大会においても、かならずしも全部の論文がよまれていたわけではなかった。橋本 [1973: 15] には次のような記述がある。「研究発表者は必ず全文をプリントして、大会までに参会予定者に配布してあらかじめ読んで来て戴き、会議はいきなりその討論から始めるということにしていたのである。これはしかし一部の人の心得違いから、もうイサカ市の会議（第 3 回）あたりからズルズル破られてしまった。その後の或る会議では、当日 100 頁近い論文を配布し（とてもそんなものを 2 分間や 3 分間で読めたものではない）、しかも研究発表はその梗概を実に 56 分も喋りに喋り（中略）56 分間も喋られるのにもまいるが、52 篇の論文も大変である。二三週間のうちにそれを全部読み、しかも討論のための準備をするなどというのは神技に近い。（中略）結局参会者の各自が、自分の守備範囲に近いものを選んでザットと眼を通して置く—という他の学会の大会の場合と少しも異ならぬことになって仕舞った」。

注77 予稿集は <https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/235256>（最終確認 2018 年 11 月 27 日）からすべてダウンロード可能である。

4 大会期間

4.1 本会議前日 (2018-09-25)

本会議前日にはポスター発表と映画上映、そして歓迎会がおこなわれた。

ポスター発表は吉田南総合館北棟一階のベルラウンジでおこなわれた。ポスター会場では同時に受付も設置し、参加者に名札と記念品（大会用カバン、京大時計台クリアファイル、素数ものさし）を配布した。名札はミシン目が二つはあって三つ折りできるものを用意した。名札のほかに、大会登録料と懇親会参加費の領収書もかねるものとした^{注78}。

受付は混雑が予想されたので、日本からの参加者については受付にこないように事前に依頼した。日本からの参加者については全員の顔と名前がわかっているの、時間があるときに個別に対応することにきめていた。また、受付は中国人とその他の外国人にわけ、中国語を解する林氏や鈴木氏、また林氏の学生である陳鴻氏に中国人参加者への対応を依頼した。

ベルラウンジの一角には、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の名誉教授である新谷忠彦先生の著作を展示し、希望者に配布した。新谷教授の著作にはおおくの参加者が関心をもったようで、20種類、のべ200冊以上展示したうち、大会期間を通じて100冊以上がもちかえられたようである。

ポスター発表は3件あり、そのうち1件は発表者本人が不在で、後日口頭発表する予定の人が代理で発表していた。ポスター発表は、予定の時間をすぎても見学者があらわれるほど盛況であった。

ポスター発表のあとは吉田南総合館北棟三階に会場をうつし、*Denise Bernot : Langues, Savoirs, Savoir-faire de Birmanie* の上映会がおこなわれた。映画は大変好評であった。

映画上映のあとは、京都大学本部構内のカフェレストラン・カンフォーラで歓迎会がおこなわれた。歓迎会には参加者を無料で招待した。40人ほどの参加者があった。

4.2 本会議初日 (2018-09-26)

本会議初日からは、すべての発表が吉田南総合館北棟三階の教室でおこなわれた。本会議初日は三会場で合計29件の口頭発表があり、最後にロンドン大学 SOAS の Justin Watkins 教授による基調講演があった。

会場の外の廊下では、前日にひきつづき、新谷教授の著作を展示した。新谷教授の著作は、最終日まで展示することになった。

また、本日から三日間にわたり演習室を一室かりきって、託児室とした。

このほか、あるインド人参加者から「大会参加証明書」がほしいといわれたので、急遽作成した。

^{注78} 近年、各種学会でこの種の名札がよく使用されている。本大会では京都大学生協コンベンション・サービスセンターに作成を依頼した。75人分用意し、吊り下げ名札入れもふくめて2万円ほどかかった。

4.3 本会議二日目 (2018-09-27)

本会議二日目は二会場で合計 20 件の口頭発表があり、最後にカリフォルニア大学バークレー校の James A. Matisoff 教授による基調講演があった。

基調講演のあとは、京都大学時計台二階の国際交流ホールで懇親会がおこなわれた。懇親会では、はじめに森田玲・香織夫妻による篠笛演奏があり、その後で基調講演者三名による鏡開きがおこなわれた。

食事は時計台のレストラン「ラ・トゥール」による立食形式のブッフェとした。ベジタリアンに配慮してベジタリアンメニューも用意した。

食事中に森田夫妻による篠笛の演奏と、祇園からの芸舞妓さんによる歌と踊りが披露された。

懇親会の途中で、大会の常連であり Daai Chin 語の研究者である Helga So-Hartman さんの訃報が Justin Watkins 教授と David A. Peterson 教授から報告され、参加者が黙祷をささげた。

その後、2019 年の第 52 回大会の主催者であるシドニー大学の Mark Post 講師と Gwendolyn Hyslop 講師から、次回大会について説明があった。2019 年は国際先住民言語年であり、それを記念することもかねて、6 月に国際漢蔵語学会を開催したあと、連続してヒマラヤ諸語会議 (Himalayan Languages Symposium) も開催するということであった。さらに、ひきつづいてキャンベラのオーストラリア国立大学で国際歴史言語学会も開催され、チベット・ビルマ語関係のパネルもひらかれるという案内もあった。

インド工科大学コクラジャール校の Bihun Brahma 講師からは、2020 年 1 月ごろにアッサム州・コクラジャールで開催が予定されている第 11 回国際東北インド言語学会の案内もおこなわれた。

このほか、Poll Everywhere をもちいたアンケート形式による余興をおこなった。

懇親会には 70 人ほどの参加者があり、篠笛と芸舞妓を中心に大変に評判がよかった。

4.4 本会議三日目 (2018-09-28)

最終日である本会議三日目は二会場で合計 19 件の口頭発表があり、最後に台湾・中央研究院の孫天心教授による基調講演があった。

本会議前日をふくめて四日間をあいだ、予定された発表はすべて順調におこなわれた。当日に突然キャンセルされることもなく、発表の順番が突然変更されることもなかった。これは、筆者が経験してきた国際学会のなかでは、はじめてのことである^{注79}。トラブルというほどのトラブルもなく^{注80}、盛況のうちに大会が終了した。

^{注79} 日本言語学会をはじめとした日本国内の学会では、発表のキャンセルや順番の変更が突然おこなわれるようなことはありえない。国内学会では可能であることが、国際学会になるとなぜできなくなるのだろうか。おそらく、聴衆よりも発表者の都合を優先する結果、土壇場になってさまざまな変更がおこなわれているものとおもわれる。また、筆者が参加してきたような国際学会（国際漢蔵語学会、ヒマラヤ諸語会議、東南アジア言語学会、東北インド言語学会、国際ビルマ研究集会、国際ベンガル学会）は、比較的おおらかなところであるということはいえるかもしれない。

^{注80} 発表者が持参したパソコンの画面がスクリーンにうつらないというトラブルは何度かあった。とは

大会には、部分的な参加者もふくめて、日本、中国、台湾、香港、マカオ、シンガポール、オーストラリア、インド、イスラエル、ノルウェー、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカという、14の国や地域から約100名の参加があった。

5 大会後

大会後には論文集を編集する計画があった。しかし、チベット・ビルマ語学関連の論文をXeLaTeXによる投稿のみでうけつけることにしたせいもあってか、投稿希望者がほとんどいなかった。そこで、大会実行委員会として論文集を編集することは断念した。

大会後の重要な作業としては、助成金助成団体に対する報告書作成があった。報告書のなかで会計報告もおこなった。

このほか、大会の経験を第90回言語記述研究会で報告した。

6 おわりに

以上、第51回国際漢蔵語学会について、大会開催の準備段階を中心に報告した。些末な記述がおおかったかもしれない。だが「国際シンポジウムを開催するということは瑣末なことの集大成に他ならない」[梶 2005: 1]ということが、よくわかっていただけたのではないかとおもう。

国際漢蔵語学会は自由な学会である。主催者の裁量で大会を運営することができる^{注81}。また、日本におけるチベット・ビルマ語研究の世界は風とおしがよいこともあり、関係する他の研究者から「ああせよこうせよ」と指示されることも一切なかった^{注82}。ただし、この種の国際学会としては異例の運営方針（予稿集原稿の事前提出、紙媒体の廃止など）をとったことで、かえって手間やトラブルの原因になった面もあったことは否定できない。不合理あるいは不親切におもえても、一般的な大会運営にしたがってれば、さらに手間をはぶくことはできたらう。

大会を通じて印象的だった点はふたつある。ひとつは、参加者の中でも最年長の Matisoff 教授が本会議前日から最終日にいたるまで、朝一番の発表から最後の基調講演まですべての発表を誰よりも熱心に聴講し、メモをとり、積極的に質問もしていたということである。その姿に刺激を受けた若手研究者はおおかったにちがいない。もうひとつは、中国や台湾からの中華系若手研究者が多数参加していたことである。欧米やオーストラリアを中心に留学生あるいはポスドクとして滞在しているこれらの中華系若手研究者は、発表内容も充実していた。十年二十年前には、彼らがこの分野を牽引していくであろうことを予感させた。

いえ、発表と発表の間の5分間の休憩のあいだにすべて解決していた。近年の日本言語学会のプログラムにならば、発表の間に5分の休憩をいれたのは非常によかった。

^{注81} 「学会の体裁は全く主催者の自由裁量に属する」[長野 1993: 64]。だが、国際学会のなかには、大会事務局本部から逐一指示があり、開催校の裁量が制限されているものもあるときく。

^{注82} 分野によっては、学閥や師弟関係あるいは科研費等の共同研究者といったしがらみがあり、各方面に忖度したり、重鎮の顔色をうかがわなければならなかったりするところもあるらしい。

附録・第 51 回国際漢蔵語学会プログラム

以下に掲載するのは最終的な大会プログラムである。

- 発表はすべて吉田南総合館北棟東側三階でおこなわれた。
- #: 引用に際して著者の許可が必要なもの。
- *: 参加費がしはらわれ、原稿も提出された発表。原稿へのリンクは、大会専用の Dropbox にはってある。
- **: 参加費はしはらわれたけれども、原稿は提出されなかった発表。

2018-09-25

Poster session: Belle Lounge (1st floor, West side)

14:00–15:30

- *Acoustic and articulatory study of the three-way laryngeal contrast in coronal stops of Balti
..... Hussain, Qandeel, Jeff Mielke and Frankie Pennington
- *Tone group reconstruction in iGeneration Taiwanese
..... Hsiao, Yuchau
- *Linguistic variations of different age groups in the Mangdep dialects
..... Nishida, Fuminobu

Movie screening at Room A (3rd floor, East side)

15:45–16:20

Denise Bernot : Langues, Savoirs, Savoir-faire de Birmanie

Welcome Drink Service 17:00–19:00

2018-09-26

Session 1 9:00–10:40 in 3 rooms (3rd floor, East side)

Room A: Rgyalrong and Naxi

Chair Satoko Shirai

9:00–9:30

- *Rethinking the orientational prefixes in Rgyalrongic languages: The case of Siyuewu Khroskyabs
..... Lai, Yunfan, Wu Mei-Shin and Johann-Mattis List

9:35–10:05

- *Associated motion in the Brag-dbar dialect of Situ Rgyalrong

..... Zhang, Shuya
10:10-10:40
*Floating Tone of Pianding Dialect of Naxi
..... He, Likun and Liu Yan

Room B: Loloish Morpho-Syntax

Chair Kazue Iwasa

9:00-9:30

*'Give' serial verb constructions in Zauzou : beyond benefactive and malefactive
..... Miyagishi, Tetsuya

9:35-10:05

*Measuring the scalar property of predicates: the intensifier *xã*¹³ in Zauzou
..... Li, Yu

10:10-10:40

*Grammaticalization of the take-verb *si*²¹ in Nuosu in Sichuan, China
..... Ding, Hongdi

Room C: Tai-Kadai

Chair Atsuhiko Kato

9:00-9:30

No presentation

9:35-10:05

*Word Formation and Morphological Processes in Lakkja
..... Fan, Wenjia

10:10-10:40

**Some Sino-Tai Words in *Chuci*: Semantic Retention or Substratum Effects? [Abstract]
..... Luo, Yongxian

Break 10:40-11:00

Session 2 11:00-12:40 in 3 rooms (3rd floor, East side)

Room A: Himalayish

Chair Alexander Coupe

11:00-11:30

*Transitivity markers in West Himalayish
..... Widmer, Manuel

11:35-12:05

*Motion Expressions in Kathmandu Newar: Distinctive coding of deixis and path

..... Matsuse, Ikuko

12:10-12:40

*Non-finite forms of Kinnauri verbs: stems and infinitives

..... Takahashi, Yoshiharu

Room B: Qiangic

Chair Fuminobu Nishida

11:00-11:30

*Multifunctionality of the Demonstrative Enclitic in nDrapa

..... Huang, Yang

11:35-12:05

*A geolinguistic analysis of directional prefixes in Qiangic languages

..... Shirai, Satoko

12:10-12:40

#*Verb for ‘to butcher, to kill’ from ‘flesh’ — an attempt in Burmo-Qiangic dialectology

..... Gong, Xun

Room C: Written Languages

Chair Nathan Hill

11:00-11:30

#*Once again, on the “dual” suffix of Tangut

..... Arakawa, Shintaro

11:35-12:05

*A new study of the Kubyaukgyi (Myazedi) inscription

..... Miyake, Marc

12:10-12:40

*Sino-Vietnamese Readings in the 15th Century — Evidence from the Chũ Nôm materials

..... Shimizu, Masaaki

Lunch Break 12:40-14:00

Session 3 14:00-16:15 in 3 rooms (3rd floor, East side)

Room A: TB Historical Linguistics

Chair David Bradley

14:00–14:30

*The linguistic prehistory of the western Himalayas

..... Widmer, Manuel

14:35–15:05

*What can Tamangic medial / tell us about Bodish verbal morphology?

..... Zhuang, Lingzi

15:10–15:40

*The ancestry of Sino-Tibetan populations and languages

..... Wu, Mei-Shin, Yunfan Lai and Johann-Mattis List

15:45–16:15

*Towards a computer-assisted reconstruction of Proto-Burmish

..... Hill, Nathan and Johann-Mattis List

Room B: Miscellaneous Topics

Chair Yongxian Luo

14:00–14:30

*An interim field report of Suma and Mlabri: Two endangered languages of Laos

..... Kato, Takashi

14:35–15:05

##Cantonese Equative Constructions in Typological Perspective

..... Lai, Yik-Po

15:10–15:40

*The Competition between Contour and Register Correspondence in Music-to-Language Perception: Evidence from Mandarin Child Songs

..... Ling, Wang-Chen

15:45–16:15

*Relative Clauses in Lan Hmyo

..... Taguchi, Yoshihisa

Room C: Syntax of Chinese Dialects

Chair Norihiko Hayashi

14:00–14:30

##On the semantic extension of the existential/possessive negator *mau³³tæ²¹* 有得 in Rucheng (Sinitic)

..... He, Lisha and Shanshan Lü

14:35-15:05

*Verbal aspects and verbal classifier structures in Hui Chinese

..... Liu, Boyang

15:10-15:40

*On the syncretism of *tau*⁵⁵ 到 ‘arrive’ and its pathway of grammaticalization in the Pingjiang dialect (Sinitic)

..... Peng, Daxingwang

15:45-16:15

*The temporal reference of aspectually unmarked bare accomplishment ba-sentences in Taiwanese Mandarin

..... Chang, Ying-Ju

Break 16:15-16:30

Plenary Talk by Prof. Justin Watkins at Room A (3rd floor, East side)

Chair Kenji Okano

16:30-17:30

The fate of Sino-Tibetan languages in Myanmar in the digital age [Tentative]

..... Watkins, Justin

2018-09-27

Session 1 9:00-10:40 in 2 rooms (3rd floor, East side)

Room A: Topics in Loloish and Others

Chair Hideo Sawada

9:00-9:30

*Favorlang songs transcribed in Southern-Hokkien: Decipherment

..... Ochiai, Izumi

9:35-10:05

*The syntax of relative clauses in Lalo Yi

..... Liu, Hongyong and Bu Weimei

10:10-10:40

*Phonetic Features and Genetic Position of Cosao

..... Bai, Bibo and Xu Xianming

Room B: Tibetic

Chair Marius Zemp

9:00–9:30

*Preliminary report on Tichyurong Tibetan (Dolpa, Nepal)

..... Honda, Isao

9:35–10:05

*Aorist in Lhagang Tibetan

..... Suzuki, Hiroyuki and Sonam Wangmo

10:10–10:40

*Evidential system in Mabzhi Tibetan of Amdo

..... Tsering Samdrup and Hiroyuki Suzuki

Break 10:40–11:00

Session 2 11:00–12:40 in 2 rooms (3rd floor, East side)

Room A: Kuki-Chin

Chair Linda Konnerth

11:00–11:30

*The structure of verb complexes in Asho Chin

..... Otsuka, Kosei

11:35–12:05

*Two Comparative Forms in Vaiphei

..... Murakami, Takenori

12:10–12:40

*Kuki-Chin utterance-final particles

..... Peterson, David

Room B: Phonology of Chinese Dialects

Chair Yoshihisa Taguchi

11:00–11:30

*Southern Pinghua: phonology and phonological diversity

..... Cao, Xiaolan

11:35–12:05

##*The emergence of /Vin/ rhymes in Northern Min Chinese

..... Shen, Ruiqing

12:10–12:40

*On the initial assimilation in the Xianyou dialect of Chinese

..... Chen, Hong

Lunch Break 12:40–14:00

Session 3 14:00–16:15 in 2 rooms (3rd floor, East side)

Room A: Various Topics on TB

Chair Manuel Widmer

14:00–14:30

*Historical relationship among three non-Tibetic languages in Chamdo, TAR

..... Suzuki, Hiroyuki and Tashi Nyima

14:35–15:05

*On the origins of Tibetan

..... Zemp, Marius

15:10–15:40

**On the distribution, reconstruction and varied fates of topographical deixis in Tibeto-Burman [Abstract]

..... Post, Mark

15:45–16:15

**Shared Inheritance or Innovation: Quadra-syllabic Idiomatic Expressions in Cantonese and Bai [Abstract]

..... Tsou, Benjamin

Room B: Bodo-Garo

Chair Gwendolyn Hyslop

14:00–14:30

*Morphophonemic processes of words borrowed from Indo-Aryan languages to Bodo

..... Brahma, Bihung

14:35–15:05

*Removing Indo-Aryan bias from the phonological description of Bodo

..... Basumatary, Prafulla and Jonathan Evans

15:10–15:40

#*Verbal suffixes /-o/ and /-k^ha/ in Kokborok

..... Ghagra, Anukampa and Jonathan Evans

15:45–16:15

#*Numeral Classifier and Word Order in Dimasa and Bodo-Garo

..... Langhasa, Dhrubajit and Jonathan Evans

Break 16:15–16:30

Plenary Talk by Prof. James A. Matisoff at Room A (3rd floor, East side)

Chair Yasuhiko Nagano

16:30–17:30

Morphosemantics of the Proto-Tibeto-Burman *a- prefix: glottal and nasal complications (with an Appendix offering analogies with the English preformative a-) [Handout] [Appendix]

..... Matisoff, James A.

Conference Dinner 18:00-20:00

2018-09-28

Session 1 9:00–10:40 in 2 rooms (3rd floor, East side)

Room A: TB Languages in Northeast India

Chair Mark Post

9:00–9:30

**Nominalization and Relativization in Kurtöp [Abstract]

..... Hyslop, Gwendolyn

9:35–10:05

**The relationship between nominalization, focus and egophoricity in Milang [Abstract]

..... Modi, Yankee

10:10–10:40

#*On the functions of quotative constructions in Tibeto-Burman: A case study of Monsang

..... Konnerth, Linda

Room B: Topics in Loloish II

Chair Justin Watkins

9:00–9:30

*A Phonological Sketch of Akha Chicho — A Lolo-Burmese language of Luang Namtha, Laos —

..... Hayashi, Norihiko

9:35–10:05

#*Attempt to identify the origin of Ms. CHI. YI. 26 [Ms. CHI. 80] of Bibliothèque Interuniversitaire des Langues Orientales, Paris

..... Iwasa, Kazue

10:10-10:40

*The Equative Construction in Lalo Yi

..... Bu Weimei

Break 10:40-11:00

Session 2 11:00-12:40 in 2 rooms (3rd floor, East side)

Room A: TB Languages in Northern Burma

Chair Pavel Ozerov

11:00-11:30

*The small closed adjective class in Jinghpaw

..... Kurabe, Keita

11:35-12:05

**Comparing a few grammatical aspects of Northern Burmish languages [Abstract]

..... Sawada, Hideo

12:10-12:40

*Reported Speech in Lisu and Burmic

..... Bradley, David

Room B: Chinese Historical Phonology

Chair Masaaki Shimizu

11:00-11:30

*The *ʃayn* theory of Grade II in Middle Chinese

..... Gong, Xun

11:35-12:05

*The Prosodic Influence on the Old Chinese Tonogenesis

..... Wang, Hongzhi

12:10-12:40

No presentation

Lunch Break 12:40-14:00

Session 3 14:00-16:15 in 2 rooms (3rd floor, East side)

Room A: TB Morpho-Syntax

Chair David Peterson

14:00-14:30

*The Anticausative in Pwo Karen

- Kato, Atsuhiko
- 14:35–15:05
- *Tracing the sources of “focus” particles
in two TB/T-H languages
- Ozerov, Pavel
- 15:10–15:40
- #*South Asian perspectives on the relative-correlative construction
- Coupe, Alexander
- 15:45–16:15
- **Not quite “Middle”: Subject autonomy marking in Tibeto-Burman [Abstract]
- Post, Mark and Yankee Modi

Room B: TB Languages in Southwest China

Chair Norihiko Hayashi and Fuminobu Nishida

14:00–14:30

*Vitality Assessment of a Sino-Tibetan Language Based on the State of Art Field Report in
Pumi Community of Yunnan, China

..... An, Jing

14:35–15:05

*Study on classifiers in Darmdo Minyag

..... Dawa Drolma

15:10–15:40

*A preliminary study of aspect markers in Meiba Bai: the case of perfective and resultative

..... Li, Xuan

15:45–16:15

*A brief introduction to Zlarong, a newly recognized language in Mdzo sgang, TAR

..... Zhao, Haoliang

Break 16:15–16:30

Plenary Talk by Prof. Jackson T. -S. Sun at Room A (3rd floor, East side)

Chair Jonathan Evans

16:30–17:30

Identifying Tibetic Subgroups: A Case in Khrochu (Sichuan) [Abstract]

..... Sun, Jackson T. -S.

参考資料

- 岩田礼. 1989. 「第 21 回国際漢蔵語言語学会」『通信』 65: 28-30.
- 大津由紀雄研究室編. 2010. 『国際会議の開き方』ひつじ書房.
- 梶茂樹. 1999. 「国際シンポジウム「音調に関する通言語的研究—声調の発生, 類型, および関連テーマ」」『通信』 96: 3-12.
- 梶茂樹. 2001. 「国際シンポジウム「音調の通言語的研究—声調の発生, 日本語アクセント論, および関連研究」」『通信』 101: 1-9.
- 梶茂樹. 2003. 「国際シンポジウム「音調の通言語的研究—その歴史的発展, 音声的基盤, および記述的研究」」『通信』 107: 11-17.
- 梶茂樹. 2005. 「国際シンポジウム「音調の通言語的研究」報告」『通信』 113: 1-9.
- 川上夏林・藤原敬介. 2018. 「【翻訳】「ドゥニーズ・ベルノー: ビルマの諸言語と知識」」『言語記述論集』 10: 251-270.
- 中野浩嗣. 発表年不明. 「国際会議・国内学会の運営ノウハウ集」<http://know-how.is-candar.org/> (最終確認 2018 年 11 月 17 日).
- 長野泰彦. 1993. 「国際シナ・チベット言語学会」『民博通信』 60: 63-70.
- 長野泰彦. 1994. 「シンポジウム『シナ・チベット系諸民族の言語文化: 東アジア諸言語のダイナミズムを求めて』: 第二六回国際シナ・チベット言語学会」『民博通信』 63: 87-97.
- 橋本萬太郎. 1970. 「第二回シナ・チベット諸語再構学術会議」『言語研究』 57: 60-64.
- 橋本萬太郎. 1973. 「国際漢蔵諸語学漢蔵言語学第 6 回会議」『通信』 20: 14-16.
- 橋本萬太郎. 1975. 「国際シナ・チベット言語学会第 7 回大会参会記」『通信』 24: 25-29.
- 橋本萬太郎. 1977. 「第 9 回国際漢蔵緬泰言語学会大会参会記」『通信』 229: 31-33.
- 林範彦. 2004. 「第 36 回国際シナ=チベット言語学会議」『通信』 110: 27-29.
- 藪司郎. 1993. 「第 25 回国際シナ=チベット言語学会議」『通信』 77: 33-35.
- 藪司郎. 1995. 「第 27 回国際シナ=チベット言語学会議」『通信』 84: 42-44.
- 藪司郎. 1996. 「第 28 回国際シナ=チベット言語学会議」『通信』 86: 36-40.
- 藪司郎. 1998. 「第 30 回国際シナ=チベット言語学会議」『通信』 92: 33-36.
- 藪司郎・中嶋幹起. 1994. 「第 26 回国際シナ=チベット言語学会議」『通信』 80: 21-28.
- 馮蒸編訳. 1979a. 「第 1-11 届国際漢蔵語学会議簡介 (上) (1968-1978)」『語言学動態』 1979 年第 4 期: 39-43, 49.
- 馮蒸編訳. 1979b. 「第 1-11 届国際漢蔵語学会議簡介 (中) (1968-1978)」『語言学動態』 1979 年第 5 期: 40-43.
- 馮蒸編訳. 1979c. 「第 1-11 届国際漢蔵語学会議簡介 (下) (1968-1978)」『語言学動態』 1979 年第 6 期: 41-46.
- Bradley, David. 2008. Report on ICSTLL41. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31(2): 183-184.

- Genetti, Carol and Chris Donlay. 2016. Report on the 48th international conference on Sino-Tibetan languages and linguistics (ICSTLL48): University of California, Santa Barbara 20-23 August 2015. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 39(1): 174–176.
- Hashimoto, Mantaro J. 1975. The seventh COSTRE. *Journal of Chinese Linguistics* 3(1): 79–87.
- Karlsson, Jens. 2007. Report on the 40th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (ICSTLL), held at Heilongjiang University, Harbin, PRC September 26-29, 2007. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 30(2): 235–240.
- Konnerth, Linda. 2013. Conference Report: ICSTLL46. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 36(2): 139–141.
- Matisoff, James. A. 1973. The annual Sino-Tibetan Conferences: the first five years, 1968–72. *Journal of Chinese Linguistics* 1(1): 152–162.
- Matisoff, James A. 1994. Introduction to the second edition. In Randy J. LaPolla and John B. Lowe eds., *Bibliography of the International Conferences on Sino-Tibetan Languages and Linguistics I-XXV*, pp. xiii–xv. Berkeley: Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Project, Center for Southeast Asia Studies, University of California.
- Matisoff, James A. 1996. Remembering Mary Haas’s work on Thai. In Leanne Hinton ed., *The Hokan, Penutian, and J.P. Harrington Conferences and The Mary R. Haas Memorial*, pp. 105–113. Survey of California and Other Indian Languages, Report No. 10. Berkeley: University of California.
- Matisoff, James A. 2017. General History and Future Prospects for our ICSTLL’s. 『第 50 届国际汉藏语言暨语言学学会会议：提要及论文集編』 pp. 2–3.
- Pelkey, Jamin R. 2005. Report on the 38th ICSTLL: Xiamen University, October 28-31, 2005. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 28(2): 203–206.
- Sprigg, Richard Keith. 1980. ‘Vocalic alternation’ in the Balti, the Lhasa, and the Sherpa verb, as a guide to alternation in Written Tibetan, and to Proto-Tibetan Reconstruction. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 43: 110–122.
- Vittrant, Alice et Alexandra de Mersan. 2016. Denise Bernot: langues, savoirs, savoir-faires de Birmanie. https://www.canal-u.tv/video/cnrs_ups2259/denise_bernot_langues_savoirs_savoir_faire_de_birmanie.21679 (最終確認 2018 年 11 月 21 日)

(附記) 草稿段階で林範彦氏と倉部慶太氏から有益なご意見をいただいた。

受理日 2019 年 4 月 16 日